

その一 竜門の瀧

雨の激しく降る中、竜門の瀧を見物する。雨季で増水していたせいか、懸河の濁流が何とも壯観であった。しばしの間見とれていなかったが、雨がいいいよ激しく、待機しているバスへ急ぎ踵を返す。

雨足のあまりの強さに渡りに舟と用足しに立ち寄る。ふと目にとまった「厠」という字の墨痕のなんとすがすがしく、なんと達筆なこと。瀧もさることながら、むしろ私にはこちらの方に心引かれた。絶えて久しく相見えた

県内研修旅行 玖珠・日田寸描

上 杉 清 喜

(会員・佐伯市中河原)

ことのない墨の文字、かつて戦時中に中国大陸を往き来していた例の国際列車の便所に記されていたあの文字を懐かしく思い出す。あ

れには、便所、厠、それに韓国文字の三通りで書かれていた。

「長居する厠は下衆の学問所」

こんなシャレは化粧室や洗面所では様になるまい。

その二 資料館にて

玖珠資料館に所狭しと展示されてある清田先生秘蔵の各種玩具の壮観さ。正に一驚三嘆の外はない。

先生のお宅に何度かお伺いして、その豊富な品々の片鱗は拝見したことはあったが、かくも大量のものを何処に、どう保管されていたのであろうか。只々驚くばかりである。

私事今年余命を考へ郷玩の嫁入り先を玖珠町にお願い既に先陣を数度、後二年位の間に落ちつきたいと思えます。玖珠町の歓迎の熱意に感謝し積年の蒐集を活かして貰へる悦びにわいています。

これは今年初頭頂戴した先生からの年賀状である。あちこちからの初春の慶びを寿ぐ年賀状はみな嬉しく拝見したが、先生からのこの年賀状は、私にはなんとも淋し

かった。嫁入りは自由とはいえ、何とわが町に嫁ぎ先はなかったものかと。

先年、先生が市に高額の寄付をなさったことはまだ記憶に新しい。でも、理解ある姑に見込まれた、見込んだこの一人娘は、最高の幸せ者かも知れない。いついつまでも幸せを祈る。そして、陳列の片隅に使用されていた短い短い鉛筆が三、四本並べられていたのが、何とも印象的だった。

その三 三隈川に舟を浮かべて

日田は、私にとって史談会二度目の旅であった。もう二十年程前になろうか、十名位の小人数だったが、増水の三隈川に舟を浮かべ、古式ゆかしく鶴匠のあやつる鵜飼の実演を咫尺の間に見て、遠く歴史を遡らせた思いは、今も記憶に鮮明である。

誰が写したのか羽柴先生と隣り合わせて杯を傾けている白黒の写真、古ぼけた写真帖の中から見出し、往時を偲ぶことしばし。羽柴先生も、同行の幾人かも既に故人となり、正に歴史の一駒を刻んだ舟遊びであった。



前回の時も夏で、葵に似た花があちこち見られて、旅情を慰めてくれたが、その花の名を知らず、宇山の吉田さんに尋ねた処、「それはムクゲだよ」と、即座に教えてくれた。そして、

「道のべの木槿は馬に喰はれけり……こんな有名な芭蕉の句があるよ」と、つけ加えてくれた。

花は何も知らぬ、句も知らぬ己の無学を恥入ると共に、木槿の咲く頃になると思い出す二十年前の旅であった。その吉田さんも今はもういない。